カトリック仙台教区報

2008年9月7日　No.183

発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL； http://sendai.catholic.jp/

仙台教区の殉教者と殉教地
―さあ、巡礼の旅に出かけよう―

カトリック白河教会　主任司祭　高橋　昌

「巡礼とは『遠方の聖地に赴くこと』で、時には苦行を伴うものである」といわれます。

今年、長崎で日本キリシタン殉教者の中から188人が列福されるので、カトリック教会では「巡礼」の気運が高まっています。

日本の司教団は、『列福をひかえ共に祈る7週間』の小冊子を発行し、列福される殉教者のメッセージを黙想しながら、心の準備をするように呼びかけています。

当時のキリシタンが良く知っていた聖書のことばとして、次のみことばがあります。

「引き渡される時は、何をどう言おうかと心配してはならない。その時には、言うべきことは教えられる。実は、話すのはあなた方ではなく、あなた方の中で語ってくださる、父の霊である」（マタイ10・19－20）。

人間は弱い、でも神は最高の力をもっている。自分に頼るのではなく、神、イエスに頼ることで心配なく信仰生活を送ることが出来るというメッセージを殉教者は伝えています。またイエスは「義のために迫害される人は幸いである。天の国はその人たちのものである」（マタイ5・10）と語り、聖パウロは「神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」（一コリント10・13）と語りました。

大籠キリシタン殉教公園・クルス館　内部

キリシタンは、聖書を神のことば、必ずその通りになると固く信じ、黙想し、信仰生活に生かしました。私たちも毎日の生活の中に神への信頼と希望と愛を実践して行くように心がけましょう。

東北地方には殉教地が多くあります。殉教者も多くいます。高木一雄氏の『東北の殉教地をゆく』（聖母文庫）を調べました。

福島県では、白河の鶴芝（吊るし場）で16人、会津若松の薬師堂河原等（記念碑あり）で約57人、二本松の供中河原で14人（教会に記念碑あり）、猪苗代の土津神社の近くの「バテレン塚」で数名など、計約97人。

宮城県では、仙台の広瀬川殉教などで20人、この中ですでに列福されたカルワリオ神父がおります。その他で、55人、それに登米市米川の三経塚（記念碑あり）の120人を加えて計約195人。

岩手県では、盛岡地方149人、水沢地方49人、殉教地は黒須婆（クルス場）、一関地方25人、それに藤沢町大籠で214人、大籠には、殉教者を讃える教会とキリシタン殉教公園があり、資料館、クルス館があり、ヨハネ・パウロ2世のメッセージ碑はじめ、有名人の碑が多くあり、すばらしい公園、巡礼地になっています。計約438人。

青森県は弘前地区での殉教者が約88人。仙台教区内全体で約818人の殉教者がいます。

巡礼は遠方の聖地に赴くことであり、苦行が伴う。でも殉教者からの信仰、希望、愛の豊かなメッセージを受けます。私たちのために天で祈ってくださっている殉教者に感謝して、巡礼の旅に出かけましょう。

塩と光

「平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5・9）。この地上に真の平和を築いていくために何ができるのですか。平和の源は、キリストご自身です（ヨハネ14・27）。ですから、キリストのおられるところに平和が実現します。▼キリスト者の使命は、このキリストの平和を世界中に広げて行くことです。「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる」（マタイ10・11－13）。▼キリストの平和は、キリストご自身が、わたしたち一人ひとりの心の中に入られ、「敵意という隔ての壁を取り壊し、双方をご自分において一人の新しい人に造りあげる」（エフェソ4・14－15）ことにほかなりません。ですから、一人でも多くの人の心にキリストが訪れてくださるように、このキリストを伝えていくことです。▼平和のために働くことができるのは、すでにわたしたちに聖霊が注がれ、人々に真の赦しを伝えるために、わたしたちは派遣されているからです（ヨハネ20・21－23参照）。

（博）

「若い世代に信仰を伝える」
―家庭の信仰教育のすすめ(Ⅵ)

司教神学顧問　佐々木　博

生き方に根ざした信仰を育てる

信仰は、神の御心を生きる生き方です。この生き方の基本を身につけるのは、ほかでもなく家庭です。ですから、日々、親子が共に祈るのは、神に聞き従う心を整えるためです。自分中心にではなく、あくまでも神を中心にして考え、行動する心構えを新たにすることです。信仰の生き方は、自分自身のすべてを神にささげることです。この自己奉献こそが、礼拝の基礎です。この土台の上に日々の生活を築き上げていくのです。このことを、パウロが、勧めてくれます。「兄弟たち、神の憐みによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」（ローマの教会への手紙12・1－2）。「この世に倣ってはなりません」。世に迎合するのではなく、福音の価値観を大切にするので、むしろ世に逆らって生きることを身につけることが信仰です。洗礼の恵みは、日々わたしたちを新しい人に造り変える力です。「心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」（エフェソの教会への手紙4・23－24）。

「神を中心にした生き方」を、日常生活の中でしっかりと身につけることです。それは、マリアのように、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」（ルカ1・38）という生き方です。自分の我をとおし、自己主張するのではなく、あくまでも神に聞き従うという生き方です。それは、「御心を行う」（マタイ7・21）生き方にほかなりません。

家庭こそ、まさに生活に根ざした信仰を育てる大切な場です。信仰が、日々の生活から遊離しないように、あくまでも具体的な生き方の中に、信仰をしっかりと根付かせるのです。それは、ぶどうの木につながっている枝のようにキリストの愛につながって生きることです。そうすれば、おのずと喜びがわいてくるだけでなく、豊かな実を結ぶことができます。「人がわたしにつながっていれば、その人は豊かな実を結ぶ。…これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」（ヨハネ15・5，11－12）。（完）

ありがとう

司教　マルチノ　平賀　徹夫

今年７月半ばにWYD（ワールド・ユース・デイ＝世界青年の日）シドニー大会が開かれました。その模様は８月３日号のカトリック新聞に出ていましたから、読まれた方も多いことと思います。仙台教区からは４人の参加者を送りました。そして８月半ばには国内版のWYDが山梨県の山中湖畔で開かれ、これについては８月２４日号のカトリック新聞が報じていましたが、仙台教区からは１４人の参加がありました。

教区報５月号で私はこの WYD への参加を呼びかけたのでしたが、それに応えてシドニーにも山中湖にもこの数の方々が参加してくださいました。事情があって参加できなかった青年達もいただろうと思いますけれども、心を動かしてくれた青年たち、そして実際に応えてくれた青年たちに、またその青年たちをサポートして送り出してくださった小教区の皆さんに、まず、「ありがとう」です。そしてそれと同じく「ありがとう」と言いたいのは、自分の所から参加する青年はいないのに、教区全体の援助のために献金してくださった多くの小教区の皆さんに対してです。わずか２ヶ月ほどの間に、全部で５０万円近くの献金を寄せていただきました。このほかにも、その小教区からの参加者に交通費を負担してくれた教会もあると聞きました。教区の皆さんに溢れている、青年たちの動きを支えるのだという熱い思いを感じます。本当に「ありがとう」です。

参加した青年たちは、その体験を話したくて、聞いてもらいたくてうずうずしていることでしょう。９月の宣教司牧評議会の場でも報告してもらえたらいいと思いますが、仙台教区として青年たちの活動をこれからもっともっと支えて行きたいと考えています。

国内版WYDの最終日、派遣ミサでの溝部司教様の説教は「一人ひとりが派遣される。この集まりは感動を覚えるためだけのものではなかった。１０年後あなたはどう変わっているか見たいものだ」という結びでした。

司教日程　9・10月

9・1(月) 人権を考える委員会
2(火) 部落差別人権委 事務局会議
7(日) カトリック青森県の集い
9(火) 司祭評議会 司祭団役員会
11(木) 社会司教委員会
13～14 正義と平和全国集会
15(月) 福島県カトリックの集い
18(木) ドミニコ会ロザリオの聖母修道院
20(土) 米沢殉教地巡礼
21(日) 聖ウルスラ修道会管区集会
23(火) 宣教司牧評議会
25(木) 部落差別人権委 事務局会議
28(日) 遠野・釜石教会 堅信
29～10・2 教区司祭団 年の黙想会
10・3(金) 特別臨時司教総会
6(月) ドミニコ会司祭集会
11(土) パルシア10周年記念ミサ
14(火) 司祭評議会
18(土) 宣教司牧評 役員会
19(日) 岩手県カトリック大会
20～22 東京教会管区司祭研修大会
23(木) 学法東北カト学園理事会
25(土) 部落差別人権委 シンポジウム
27(月) 教区司祭団月例会

アウシュヴィッツの聖人
ミェテスラフ・コシチャルニャク作
「コルベ神父」原画展
2008・7・19～9・29
アウシュヴィッツ平和博物館
福島県白河市白坂三輪台245
TEL 0248-28-2108
収容所で他人の身代わりとなって命を落としたポーランド人のコルベ神父（1894～1941）を収容所で同室の画家が描いた原画11点、コルベ神父の直筆の手紙、日本滞在中の写真などを展示。入館料(大人) 500円

第36回カトリック宮城県大会を終えて

宮城県カトリック教会連絡協議会　委員長　岡田　耕二

第36回カトリック宮城県大会が7月6日（日）に仙台白百合学園ロザリオのマリア聖堂で開催され、天候にも恵まれ県内17教会から多くの参加（約600人）をいただき無事終了したことを主と皆さまに感謝いたします。

今年の大会テーマは「信仰の原点を見つめよう」で、例年ですと午前中は講演会でしたが今年はいろいろな立場にある方々から「私にとっての信仰の原点」という演題でお話をいただき、分かち合いました。その話を聞いた方々からは「テーマに沿って意義深い話が、各自それぞれの経験を踏まえ話された。単なる経験談というようなものでなく、信仰告白という印象を受け、内容も話し方も良く、感銘を受けた」、「神さまの一人ひとりへの呼びかけ、人との出会いに感動した。自分の原点を振り返ることができた」、「発表は信仰の原点に戻った感じで良かった。幼児洗礼者も対象にして考えを聞きたかった」など〝良かった〟との感想が多く寄せられました。

また、聖歌指導＝写真円内＝では、「指導の仕方が的確で分かりやすかった。メリハリがあり飽きなかった」県南のある教会の方からは「教会に聖歌を指導できる方がいないので今回の企画は良かった」、他に「時間が長すぎた」、「各地から集まる県大会の場で、わざわざなぜ練習するのか？大会テーマと聖歌指導をどう結びつけるのか？」など多くの感想や意見をいただきました。

大会プログラムの内容では「県大会は各教会と交流する絶好の機会なので、昼食時間を利用して交流できるような〝仕組み〟を是非つくってほしい」との意見が多くありました。大会運営面では、受付の混乱や大会終了後の車輌誘導係の不足、会場の清掃等で反省すべき点も多くありました。

そして宮城県カトリック教会連絡協議会のメンバーは、これらの意見・要望・反省点を踏まえ、来年の大会に向けて活動を開始しました。次回の大会も主の御旨にかなったものになりますように皆さまのお祈りとご協力、ご参加をお願い致します。

《招きに応えるということ》

ラ・サール会修道士　大友　成彦

司祭や修道者になった人達は、それぞれ様々な個人的な実存的経験を味わっております。

第二次世界大戦直後に、私は修道院に入りましたが、同年代の多くの司祭や修道者は殆ど戦争経験が契機となっているようです。現在は北半球の召し出しが減少し、南半球からは割合多くの司祭・修道者・宣教師が輩出しておりますが、その理由は生活環境の変化が大きいようです。いずれにせよ、一定期間の初期養成を経て司祭や修道者になりますが、それから司祭として、修道者として、様々な生涯養成と試練を受けて成長し、臨終を迎えて、《招き》にはっきりとお応えしたことになります。その生涯は、イエス様のご生涯を模範としています。イエスさまは、〝霊に追いやられて〟40日間の初期養成を済ませてから異邦人をも含む救済へと視野を広げ、神の国実現がご自分の一生涯の間に起こるのではなくて、死を通して完成されることを悟ります。

私達も、イエス様の様々な経験と試練を思い浮かべながら、視野を広げ、試練を乗り越えて、祈りながら成長することができるように願っております。

招きにこたえて ⑳

杜の風に光を求めて

日本カトリック幼稚園連盟

第53回教職員研修大会　仙台大会

「今こそ真のカトリック幼児教育を」と、全国から1000余人のカトリック幼稚園職員が7月29・30日、仙台国際センターに会した＝写真＝。

基調講演で池長潤大司教（大阪大司教区）は、「カトリック幼児教育の使命を果たしていくために」と題して、幼児教育の先駆者である、フレーベルや、モンテッソーリの教育理念を紹介し、その源泉にキリスト教の精神が基盤になっていることを強調した。

「子供が幸せと思える世界（環境）の中に子供をおいてください。子供の内なるものを呼び覚ます環境を整えてやれば、幼児は神がそなえられた能力を自然に発揮させて伸びていくものです」と、幼児教育の使命について話された。

大会は、テーマごとの分科会、特別講演等が行われ、大会ミサを持って終了した。

WYD「世界青年の日」シドニー大会

＜あなた方の上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてわたしの証人となる。＞

（使徒言行録１・８）

聖霊の働きを感じ、力を受けた巡礼

「私をお使いください」

一本杉教会　御供　真人

８月14日から一週間、ＷＹＤ（ワールド・ユース・デイ・世界青年の日）シドニー大会に参加させていただきました。ＷＹＤは教皇ヨハネ・パウロ二世が世界のカトリック青年たちに受難の主日に集まるよう呼びかけられて始まったもので、大会全体が聖週間をなぞらえた巡礼の旅です。

前回２００５年のケルン大会では体育館での寝袋での雑魚寝、食事の配給が滞り、交通手段が麻痺するなど、本当に何もない中で、だからこそ、イエスのもとに共に祈るために集まることの喜びを感じる旅でした。

今回のシドニー大会でも、前回同様に毎日心をゆり動かす司教様方のカテケージスとミサ、祈り、分かち合い、ゆるしの秘跡があり、司教様や神父様方も青年たちと共に歩き、共に祈り、共に過ごして下さいました。初代教会の信徒になったような旅でした。しかし、前回と違って、泊まりは恒例の教皇ミサ前夜の野宿を除いては親切な家族のもとにホームステイ、食事も交通手段もきちんと運営されており、本当に至れり尽くせりの旅でした。

あまりに快適で本当にＷＹＤなのか、巡礼なのか、と悩むほどでしたが、それらは多くの人たちに支えられて与えられた豊かな恵みであることに気付きました。ホームステイは日本巡礼団の宿泊場所がぎりぎりまで決まらず、急遽地元教会の信者さんたちが受け入れて下さいました。シドニー市民は大会中に不便を強いられ、大勢のボランティアが大会運営に携わっていました。

私は仙台教区の皆さんが派遣してくださったお陰でシドニーに。

自分の選びは、主の恵み、そして多くの人がささげた犠牲の上にあること。私たちは誰でも愛される価値がある、誰が何といおうと主と共にいるからめでたく生きていける。神様は、誰かを通して私たちを必要としている。大切なのは立派さではなく「私をお使い下さい」という心。どんな小さなものでも喜んで差し出せば、神様が大きなわざに変えて下さる。大会のテーマは「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、わたしの証人となる。」本当に聖霊の働きを強く感じ、力を受けた巡礼となりました。次回２０１１年はスペインのマドリードです。ぜひ多くの青年が仙台教区から参加されることを願っています。ありがとうございました。

初めて参加して

一本杉教会　山本　亮

今回のＷＹＤではいろいろな事を体験することが出来ました。

行く前は学校のテスト期間と重なりあまり乗り気ではありませんでしたが、シドニーに着き、日が経つにつれてテストのことも忘れるぐらい充実していきました。

大会中は教会に泊まる予定でしたが、急きょホームステイすることになり僕はジョンさんというおじいさんの家に泊めてもらうことになりました。

ジョンさんは朝早くから朝食を作ってくれたり、とても親切な方でした。

会場や道を歩いているといろんな国の人たちが話しかけてくれて交流することができました。

この旅ではたくさんの人と接ったり初めて体験することが多く、だいぶ成長することができたと思います。

現地の人はとても協力的で大会中本当にお世話になりました。

この大会のために支援や協力してくださった信者の方々やスタッフの方やシドニーの人たちに感謝したいと思います。

そして派遣してくださった仙台教区のみなさんに感謝します。ありがとうございました。

＜WYD in JAPAN 2008（山中湖）＞

体験を生かし、証しすること

仙台中央地区担当司祭　舟山　亨

8月14～17日の4日間、山梨県の山中湖でWYDinJapanが開催され、全国から200名の青年が集まりました。

仙台からは平賀司教と共に、青年11名・修道者1名・司祭2名が参加いたしました＝写真＝。今回、仙台教区の皆様から参加する青年達に対して、祈りと共に金銭的な援助をいただきましたことを深く感謝いたしております。本当にありがとうございました。これからも仙台教区の青年が、豊かな心で成長することが出来るようにお祈り下さい。

WYDが始まったのは、国連が1985年を「世界青年の日」と定めたことで、当時のヨハネ・パウロ二世が青年の集いを呼びかけたのが始まりでした。WYD自体は毎年行われているのですが、2～3年に一度は世界大会が行われています。日本カトリック司教団では、2002年のトロント大会より、世界大会に参加できなかった青年に対し、同じような体験ができるように、国内版としての大会が開かれるようになりました。

今大会中のテーマは「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そして、私の証人となる。」(使徒言行録1章8節)でした。3人の司教によるカテケージスの後、グループごとの分かち合いを行い、ゆるしの秘跡やミサを通して青年達は秘跡について、より深く理解するチャンスを得たと話していたのが印象的でした。大会が終わってそれぞれの場所に派遣されてゆきましたが、大事なことは、各自体験した事を実生活に生かし、証してゆくことです。自分たちの課題を理解し、しっかりと向き合ってゆくことで、自分の与えられた厳しい現実の中にも、神様のゆるしと平和を広げる役目を与えられているのです。

「祈りを深める研修会」in 仙台

この研修会は「イエズス会霊性センターせせらぎ」(代表・アモロス神父)が、今年度から東京で行っているプログラムをそのまま、仙台（会場・元寺小路教会）に移したものです。祈りを体験しながら、同伴者の助けを受けて、自分の祈りを確かなものとしていくために一歩一歩歩めるようなプログラムです。

第1回7月21日「祈りとは」第2回9月15日「自然を素材に祈る」第3回10月13日「生活を素材に祈る」

一回目は、宮城県をはじめ山形、福島から26名が参加しました。祈りの体験を振り返り、祈りの時間を持った後、分かち合いをして、参加者一人ひとりが、祈りについて深める時間を持ちました。

東京でのプログラムは、全6回です。ですから来年度、仙台で以下のような研修を予定しています。第4回「み言葉を素材に祈る」第5回「意識の糾明」第6回「祈りの同伴」となります。（Sr.津田）

マリア祭

日本カトリック看護協会（JCNA）仙台支部は、活動の一環として毎年光ヶ丘スペルマン病院で「マリア祭」を行っています。

「マリア祭」は、入院患者さんとそのご家族に楽しいひとときを過ごしていただきたいという想いで、20数年前より続けているイベントです。今年も8月2日の午後、ホスピス病棟のティルームで、司祭の話と祝福のあと、光ヶ丘ファミリー（東仙台教会所属の素敵なご家族）によるコーラス＝写真＝。歌に涙を流される方や一緒に口ずさむ方もおられ、ご家族も満面の笑顔を見せてくださいました。

小一時間の小さなイベントですが、神様の愛とボランティアさんに支えられながら続いています。（赤井）

告知板

◇仙台ロゴス研究所　第８回講演会◇

日時：2008年9月28日（日）13：30～15：00
会場：カトリック北仙台教会　信徒館
演題：「イースター島文明はどうして滅びたか―地球環境を考える―」
講師：猪岡　光　氏（東北大学名誉教授）
参加費：無料
問合先：カトリック北仙台教会　江刺・京野
TEL：０２２（２３４）８５４０

◇仙台病障連研修会◇

日　時：10月26日（日）11：00～
場　所：カトリック元寺小路教会
テーマ：心の病いとキリストの思い
講　師：小宇佐敬二神父（ガリラヤの家所属）
主催：カトリック仙台司教区
病者障がい者団体連合会

どなたでもご参加ください。軽い昼食を用意しております。
連絡先：三田（022－227-7709）
槙野（022－256-6528）

第9回全国カトリック・スカウト・キャンポリー（第2回国際キャンポリー）

全国のカトリック・スカウトが一堂に会した、このキャンポリーは『光の子として歩もう』をテーマに、諸外国、日本全土から約１１００名が参集し、仙台教区内の岩手県滝沢村・国立岩手山青少年交流の家で、８月７日（木）から11日（月）の期間開催され場内・場外で20種類のプログラムが実施された。

開会式は、平賀徹夫司教も列席し、励ましの言葉をいただいた。

８月９日の場外プログラムに巡礼プログラムがあり、大籠教会・キリシタン洞窟・貴重なキリシタン遺物のある資料館・船越保武作キリシタン像のあるクルス館・米川教会など東北最大の殉教地を巡礼し、大籠教会にて「長崎列福記念ローソク・ミサ」が平賀司教主司式でカトリック・スカウト担当の梅村昌弘司教（横浜教区）ほか７名の司祭の共同司式ミサがささげられた。

開催期間のミサは、毎朝６時、７時、８時の３回ささげられ、10日の主日ミサは、９時30分から主司式梅村司教と11人の司祭による共同司式でささげられた。

４年に一度のこの大会が仙台教区で開催されることは、前回の大阪大会で話題になり、２００６年から宮城・岩手・福島の各県の中から会場探しに入り、２００７年３月５日のカトリック・スカウト協議会全国総会でこの地に決定した。

大会テーマは平賀徹夫司教のモットー「光の子として歩もう」が選ばれた。

私たちカトリック・スカウトは、「神と国とに誠を尽し…」の誓いを常に実践して「光の子として歩む」ことを参加スカウト全員が宣言した。

大会が無事に終了したことを神様とこの大会を支えて下さった多くの方々に感謝したいと思います。

（第９回全国カトリック・スカウト・キャンポリー運営本部長　平岡　威＝東仙台教会）

米川キリシタン巡礼を迎えて

８月９日（土）米川教会には大勢のお客様がいらっしゃいました。

一行は岩手山青少年交流の家を会場に開催された第９回全国カトリック・スカウト・キャンポリーに参加した数百名中の80名、バス２台で大籠と米川の隠れキリシタン巡礼の旅です。内訳は中学生以上のスカウトで東京都と藤沢市のメンバーが主でしたがタイやマカオの仲間も居ました。そのほか引率のスカウトリーダーや司祭の皆様で大籠教会が一杯になるほどでした。平賀司教主司式のミサにあずかり一同殉教者を追悼しました。その後、各班に分かれて殉教史跡めぐりと昼食タイム、午後２時40分に米川教会で聖体訪問。地元信徒代表として信徒会長・佐藤が、隠れキリタンの歴史と自己体験でもある米川教会の集団洗礼について話をしました。

見学場所が多いため時間が足りなくなって三経塚の見学は中止になりましたが、初めて訪れた皆さんは大きな体験をしたと思います。帰路、一関の夕食時感想を求めたところ、色々な感想文が集まり行事の目的は充分果たせたと引率のリーダーからメールを頂きました。その中の幾つかをご紹介します。

◆たくさんの人が処刑された事を知り悲しみを感じた。

◆今日自分たちが信仰を持てるのも、必死で隠れた人々がいたおかげであると思い感謝の気持ちで一杯。

◆神父様がいない教会があることを知って驚いた。

◆お互いを尊重する気持ちを持つようにしたい。

◆生きている時間を大切にしたい。　等々

大籠教会は巡回教会で、数年前から年一度（８月末の主日）移動ミサをしておりますが、巡礼の方がおいでにならなければ開ける事がありません。草刈りとお掃除に毎年御奉仕下さっている北仙台教会の有志の方や、今年はキャンポリー関係の東仙台教会の方々にお世話になりました。この場をお借り致しまして御礼申し上げます。

私共米川教会の主日のミサは少人数なのですが、今回は大勢の方をお迎えし、梅村・平賀お二人の司教様によるミサ＝写真＝に参加することが出来、喜びに浸っております。（佐藤憲一）

仙台教区の平和旬間

「平和を祈り、歌い、分かち合う」

平和を求めるミサ

教区内のすべての小教区で、8月10日の日曜日にささげました。この式次第は、平和旬間実行委員会が作成し、各教会に配布したものです。このミサによって、教区が一つとなって平和のために祈ることを、平和旬間の中心にしたのです。ちなみに、このミサの聖書朗読箇所は、第一朗読が「イザヤ書2章2節～5節」、第二朗読が「使徒パウロのエフェソの教会への手紙2章14節～18節」、そして福音は「ヨハネによる福音20章19節～23節」です。

きくちゆみさん講演会

旬間に先駆けて、8月2日（土）の午後1時30分から、司教座聖堂で開催されました。平和運動家のきくちゆみさん＝写真＝は、9・11の事件を機に、グローバル・ピース・キャンペーンを立ち上げた、日本での平和省設立を目指す「平和省プロジェクトJUMP」代表です。そして、ご自分も「争わず豊かに生きていけるライフスタイル」を追求して、千葉県で自給自足の生活を送っています。講演のテーマは、「9・11から始まる私の平和運動」で、アメリカの外交政策と9・11事件に関して、非公開の資料を映像で公開しながら、2時間にわたって熱弁をふるいました。

8・15平和を求めるキリスト者合同祈祷集会

10日午後2時から、司教座聖堂で開催されました。これは、毎年「仙台キリスト教連合」の主催で行われるエキュメニカルな祈祷集会ですが、昨年からはテゼの祈りの流れを土台にして、聖書朗読や詩篇での祈り、説教の他にグループの歌と演奏、仙台白百合学園の中高生の合唱などによる特別出演もあり、特に、若い世代が平和のために祈り、歌い、みことばを分かち合うことができました。また、第二部として戦争体験を聞く集いもありました。

（佐々木博）

2008年度中高生会サマーキャンプ

8月6日（水）～8日（金）。仙台の中心では七夕祭りで盛り上がりを見せている三日間に仙台中央地区中高生会では、石巻市網地島（あじしま）で恒例のサマーキャンプを行いました。今年は中学生6人、高校生7人の、合わせて13名の参加がありました。宿泊場所は「島の楽校（がっこう）」という、廃校になった中学校を改修した宿泊施設でした。このキャンプの数日前から、地震が相次いで発生し、状況によってはサマーキャンプ自体を中止せざるをえない。そんな不安に苛まれていましたが、皆様のお祈りのおかげか、合宿中3日間は晴天に恵まれ、何一つ欠けることなく、スムーズなキャンプを行うことができました。廃校の雰囲気たっぷりな肝試しや、透き通るようにきれいな海での海水浴。バーベキューではダビデ神父様のパエリアが振る舞われました。キャンプファイヤーでは、みんなで一から台本を作った聖書劇を披露し、それに対抗して、リーダーの独り即興劇など盛りだくさんな時を過ごしました。普段、教会に来られない人や毎週のように教会に来ている人、年上のリーダー、神父様と共に神様の恵みをいっぱいに感じられた3日間だったと思います。

（八木山教会　安富良輔）

ちょこっとQ&A おせえて

聖人と福者について

Q：聖人と福者はどう違うのですか？

A：聖人、福者という言葉の違いは、「聖人」という概念が明確になった段階で、「福者」と区別されて使われるようになったものです。

初代教会の時代から、聖なる生涯を送った人を「聖人」だと認定された人がいたようです。しかし、今日のような制度ができたのは、17世紀に入ってからのことです。

信徒や司祭、修道者が、その生活をもって、あるいは自分の命をささげることによって、イエス・キリストが神であることをあかしし、聖なる生涯を送った人々の死後、その人の属していた地方教会や所属団体から、教皇庁列聖省に、聖人の調査の申請をします。

その調査によって、列聖省がその人の生涯が英雄的、福音的な生き方であったことを認め、さらに、殉教者には必要ありませんが、殉教者以外の人には、一つの奇跡が必要とされています。最終的な調査資料を基に列聖省の枢機卿委員会での審議を経て、教皇が列福の教令に署名し、列福式によって、「福者」と宣言されます。「福者」と宣言された人の国、地方の教会では、その記念日を定め、祝うことができます。

「福者」が列聖されるためには、その取り次ぎによって二つの奇跡が認められなければなりません。奇跡について、生涯について、より厳密な審査を経て、「聖人」と公に宣言されますと、全教会で、その聖人の名を記念してミサをささげることができるようになります。

「聖人」は、全世界の誰でも洗礼名にすることができますが、「福者」を洗礼名にすることは、その国に限って可能です。

活動紹介

ボーイスカウト青森第４団

団委員長　根岸英樹

ボーイスカウト青森第４団です。私共の団は、昭和32年３月に青森浪打教会を育成団体とし、青森第７隊少年隊として発隊したのが始まりです。

昭和35年２月には団号統一により青森第10団と呼称変更され、さらに平成11年４月には、所在地ごとに呼称することによる団号統一で、青森第４団と改められ現在に至っています。

登録人数は、ここ数年80名前後となっており、ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊、ベンチャー隊の４隊を有し、女子スカウトも18名おり、各隊のプログラムに華やかさを増しています。

活動としては、９月・入隊・上進式、10月・四者合同バザー、１月・新年もちつき会、２月・B－P祭を定例団行事とし、各隊ごとに独自のプログラムを展開しています。

また、ねぶたじょっぱり隊奉仕、和幸園（老人ホーム）訪問、平内敬老祭り奉仕などの、地域社会の奉仕も積極的に行っています。

平成19年11月には、発団50周年記念式典も成功裡に無事終了し、社会教育としての団体生活を推進していくことを再確認し、指導者、スカウト共に、次の50年に向けてのスタートとし、頑張っています。

平成19年　上進式

ガールスカウト青森第二団

団委員長　岡本みどり

団の会員は、就学前１年から高校生の少女と、少女たちを支えるボランティアの成人会員で構成されています。活動場所は主にカトリック幼稚園、スカウトハウスです。主な活動は、月例の集会、赤い羽根、ユニセフの募金、特に、難民に学用品を送るピースパック運動は10年以上続けて参りました。

このようなボランティア活動、社会に役立つ女性を育てることを目指しております。

教会の皆さまとは、隔月の教会掃除の手伝い、野外ミサ、合同バザー、クリスマスキャロルに参加させていただき交流を深めております。

左の写真は、昨年のクリスマスキャロルの時の一コマです。不安でドキドキのハンドベル演奏でしたが教会の方々の歌声に支えられ無事終えることが出来ました。

私の気分転換

浪打教会　日下　昭夫

町内会の会長や少年友の会の事務局長など、対人関係で溜まるストレスは半端でない。気分転換はなんと言っても家族とくつろぐひとときである。近くの病院に入院している百三歳の母に叱られたり、同居している十一ヶ月の孫から頭突きやパンチをもらうのも結構嬉しいものだ。

新刊案内

『恵みの風に帆をはって　ペトロ岐部と187殉教者物語』

編著者『まるちれす』編纂委員会／監修　溝部脩司教／発行　ドン・ボスコ社／定価１８００円＋税

11月に列福されるペトロ岐部と187殉教者について、子どもと一緒に読める本がありませんか、という問い合わせをたびたび受けていたのですが、本書は、この希望に答えるものです。長崎教区の古巣師を編集長に、司祭、信徒、修道女からなる６人の編集者と４人の画家の協働作業で完成した１８８人の殉教者の物語です。

本書のタイトルは、司祭になったペトロ岐部が日本に戻るために、マニラを出発する直前に書いた手紙の言葉、「神からの恵みの風に信頼し、帆をはって、今、出発します」から取られたものです。

八代、山口、薩摩、江戸など、各地域から、代表的な殉教者を取り上げて、彼らの生き方、信仰、そして、現代の私たちの信仰生活に必要なことが物語として描かれています。美しい挿絵が、物語の理解を助けてくれます。

本書は、ペトロ岐部と187人の殉教地を示した地図や、彼らの名前、キリシタン年表、さらに「殉教者とはどんな人ですか」などのQ＆Aなど、しっかりした資料がそえられていますので、大人も子どもも満足できる本に仕上がっています。ぜひ、教会学校で、家庭で親子そろって読んでいただきたいものです。